

底

目次

あとがき	底 ↳bottom↳
・	・
・	・
・	・
21	7

底
~bottom~

寒い。

暗い。

冷たい。

深く、昏く、沈んでいく。

いつまでも。どこまでも。

海面^{うえ}を目指そうかとも思ったが、どうにも腕を動かすのが億劫で、脳が信号を発するのを拒否した。背負い込んだ^{こうてつ}艀装は気怠さと共に全身を沈めていく。抵抗する気力と共に、体は暗い水底へと落ちていった。

光はない。とつくの昔にずっと、ずっと遠くへと消えてしまった。

揺れる水面みなもも、この光量では夜空と変わらない。掴もうとしても掴めず、間を埋める空
 虚は測り知れない。海面を超えたその先に何かあるのか——想像した所で、沈む一方の体
 には暇潰しの妄想程度の興奮剤にもなってくれない。泳あがれげれば良かったと思つたが、何が
 良いのかまでは理解できなかつた。

——私は・・・死ぬのか。

海の真ん中で沈む、という事は死と同義だろう。人間は水中で生存できない。それは艦
 娘として同じことだった。周囲に何も無い海では救援も絶望的だ。

恐らくは、引き上げる事も不可能なくらいの深度に達している。感覚ではそれくらいの
 時間が経っていた。深海への誘いに誘われるまま、彼女は静かに目を閉じた。



子供の頃の話だ。

私には姉がいた。私たちは見た目は良く似ていたが、性格はまるで別物だった。明るく快活な姉と、人付き合いが苦手で口数の少ない私。

私はいつも姉の後ろにくっついていて、姉の服の袖をきゅつと掴み、袖のない服を着ていた時は人差し指を掴んでいた。そして、はぐれないようにピツタリと後ろを歩くのだ。ある日、そんな私をうざったく思ったのか、姉は私の手を振り解いた。そして「いつまでも子供じゃないんだから、ひとりで歩きなさい」と言った。

今まで誰かにくっついて歩いていた私は、姉の歩調に追いつく事が出来なかった。姉を求めて腕を振り回し、あまつさえ転倒してしまった。

振り向いた姉は、私に向かって言い放った。

私は泣き出した。



溺死は苦しいと聞いていた。しかし、呼吸を止めた時のあの苦痛はいつまで経っても襲ってこない。肺の隅々まで浸水しているのは感じていたが、感じる痛みは全身の肌寒さく

ら이었다った。

目蓋は自然と上がっていた。気持ちは不思議と穏やかだ。蒼いゆらめきをぼんやりと見つめ——蒼い？　ここは深海ではなかったのか？　ここにあるのは光すら届かない暗黒の筈だ。

ヌツと。視界に顔が割り込んだ。人間の顔だ。しかも知っている。

（——ヒュウガ）

ソイツは金色の瞳に下卑た笑顔を浮かべながら、彼女の名前を呼んだ。超弩級戦艦、伊勢型二番艦『日向』——それが彼女の名だ。誇りある艦娘としての名。

そして、ソイツの名は——名は、そういえば知らない。深海棲艦の戦艦ル級という識別名称はあったが、それもこちら側のルールに則った命名だ。彼女自身に固有の名があるのか、聞いたことはない。

——こちらからは名乗ったというのに、不公平なものだ。

未知の生物相手に公平さなど求めるべくもないが、彼女はそう思った。奴らは不公平だからこそ理不尽だ。出会った時から敵だった。だからお互いに武器を向けるし、理解も出

来ない。

(ヒユウガ)

返事がないのを見て、もう一度ソイツはこちらの名を呼んだ。金の瞳は面白がる様はこちらを覗き込んでいる。海の底でも嫌な嗤い方をする奴だ、と日向は思った。

このル級は沖ノ鳥海域を占拠していた深海棲艦の旗艦だった個体だ。何度となく砲を交え、ようやく撃破した難敵だった。初めて会戦した時から日向に並々ならぬ興味を持ち、執拗に付け回されていた。それがまさか、こんな海の底まで追ってこようとは。

「お前は・・・とつくに沈めたはずだろう」

言おうとして、日向は二つの事に気付いた。一つは、声が出ない。水中なのだから当たり前だ。もう一つは、それが詮無い言葉だったという事だ。奴らは深海から来たのだ。いくら沈めたところで、それは元いた場所に叩き返しただけに過ぎない。

(ソウ・・・ダカラ待ッテイタ)

こちらの言わんとした事を汲み取ったのか、そう言つて深海棲艦は笑みを深くした。その瞳の色味までもが深まったような錯覚に、日向は頭痛を覚えた。

(ヒユウガ・・・コツチニコイ)

こつち？ こつちとはどつちのことだ？

——いや、本当は分かっている。噂で耳にしたことがある。コイツ等は……

(私タチノ仲間ニナレ)

コイツ等は、沈んだ艦娘を取り込んで仲間を増やす。

(オマエニハソノ資格ガアル)

資格？ これから沈む艦に何の資格がある？

(ワカツテイルダロウ・・・奴ラハオマエヲ見捨テタ・・・ツカイ潰シタンダ)

深海棲艦の声には怒りと、怨嗟と——愉悦があつた。

(オマエニハ復讐スル資格ガアル)

グルグルと蒼い光が魚群の様に渦巻く——いや、それは比喻というにはあまりにも直接的過ぎた。蒼い光は深海棲艦の瞳が放つ光だ。幾千、幾万、幾億というそれらの瞳が、ギリついた欲望をチラつかせながらこちらを見下ろしている。

(ナンデ・・・ナンデ・・・)

恨みの声を漏らして。

(見捨テ・・・ナイデ・・・)

(マダ動ケル・・マダ戦エルノニ・・・)

(味方・・・ナノニ・・・仲間ダト・・・思ッテイタノニ・・・)

深海棲艦たちを形創る怨念が流れ込んでくる。身を磨り潰すような無念の数々は、凄惨な死の瞬間を日向の脳裏に刻みつけていく。

ある者は孤立無援の砲火の中で敵を求め続け――

ある者は誤認処分され――

ある者は味方に裏切られ――

ある者は私利私欲の為に切り捨てられ――

そうした『やり切れない死』の数々が、日向の眼前にまざまざと繰り広げられた。

(オマエダツテソウダ・・・)

蒼一色だった深海棲艦の渦は、気付けば痛いほどに目まぐるしく色を変え、騒然と周囲を染め上げていた。蒼から紅へ、紅から金へ。色の移り変わりが早まるほど、フラッシュバックしてくる深海棲艦の記憶は鮮明になっていく。

そして、あの時の記憶が蘇ってくる――

忘れていた訳ではない。だがつい数時間か、数十時間か前の記憶でも、自分が死ぬ瞬間の記憶というのには蓋をしたくなるものらしい。

(撤退するべきです！)

最後まで帰還を主張していたのは、姉の伊勢だったか。

(部隊の疲弊も酷いし、何より日向は大破しています。このまま行けば沈められる！)

姉の主張はもつともだ。艦を失う危険性がある以上、無理な進軍はするべきではない。一発でも被弾すれば日向が沈没するのは明白だった。これ以上の進軍は彼女に「死ぬ」と命じているようなものだ。だが――

(行こう、伊勢)

進軍を提案したのは、自分だった。

(馬鹿言わないで！ 自分がどんな状態か分かってないの？)

(分かっているさ。もう資源が底を尽きているという事もな・・・あと一歩なんだ。奴に止めを刺せば、この海域は制圧できる。ここで引けばもうチャンスはない)

——ソレハタダノ才題目ダ。本心ノ裏返シニ過ギナイ。

(これが最後の出撃なんだ。行こう、伊勢・・・なに、私は後ろに下がって見ているよ。
前線はお前に任せるさ)

(日向・・・)

姉はそれでも渋ったが、結局は提督命令により進軍する事になった。

——本当ハ止メテ欲シカッタ。「イナクナラナイデ欲シイ」ト言ツテ欲シカッタ。

そして開戦し、味方の防御陣を抜けた砲弾が目の前に迫って——

——あの戦いは・・・そうか、結局負けたんだったな・・・

皮肉な話だ。勝ち目は薄いと分かっているがら無理をして進軍し、戦艦一隻を失い、そして戦いにも敗れた。提督は無能者と罵られることになるだろう。自業自得という言い分は作ってやったが、それで許されるほど甘いことでもない。誰が見ても撤退するべきだった。得られるものは無くとも、失うものも無かった。だが状況に溺れ、英雄的な選択肢と言葉に酔い、冷静な判断力を欠いた結果、あまりにも多くのものを一遍に失った。その中

のひとつが自分だ。

——ナンデ、ナンデ撤退シテクレナカッタ、ナンデ守ツテクレナカッタ、ナンデヨリニモヨツテ私ガわたしガワタシガ——

(思イ出シタカ?)

目覚めの気分は唾を吐きかけてやりたくなくなるほど最悪だった。出来なかったのは喉がカラカラに干枯らびていたから・・・ではなく、ここが海の底だからだ。

(オマエニハ復讐スル資格ガアル・・・オマエヲ沈メタ者タチヲ、同ジ様ニココヘ沈メテヤルノダ)

下卑た微笑がヌツと突きつけられる。鼻を噛み千切ってやろうかと思つたが、体は全く動かせなかつた。

(私ト共ニ来イ、ヒユウガ! オマエノ復讐ヲ私ガ手伝ツテヤル!)

手が。黄金の瞳が。ドス黒く燃える力が、目の前に差し出される。熱い——この芯まで突き刺さつた寒さを吹き飛ばしそうなほどに。日向はそれを手にしたい欲望に駆られた。

ようやくこの身体を温める熱が得られる。

声が出せる。何故かそれが理解できた。今なら言葉を発する事ができる。この熱を得る為の言葉を――

「折角のお誘いだが――断る」

(・・・ナ・・・ニ・・・?)

硬直したソイツの顔を眺めるのは、なかなか痛快だった。

(・・・ッ！ ナゼダ!? オマエニ死ネット命ジタアイツガ憎クナイノカ!? 庇ッテクレナ
カッタ連中ガ憎クナイノカ!?)

噴き出したマグマのように怒りを爆発させる深海棲艦を睨みつけ、日向ははっきりと自分の意思で声を発した。意思だけで声を発した。

「あそこで引けば私はアイツを見限ったろうさ。アレは必要な時に必要な決断を下せる人間だ。だから私もみんなもアイツに付いてきたんだ。それに・・・私は沈む直前を見た。沈んでいく私を、みんな涙して見つめていた。庇ってくれなかったというのとは違う。私は充分に守られていた」

深海棲艦は齒軋りして言葉を飲み込んだ。

「私は誰も恨んでなどいない。仲間を恨む奴などいるものか」

突然、周囲の光量が落ちた。蒼々とした光を放ち、色の狂乱を演じていた深海棲艦たちが急速に遠ざかっていく。

（私ノ手ヲ取レ、ヒユウガ！ デナケレバ死ヌンダゾ！）

「・・・アイツに砲を向けるよりはマシさ」

（ッ！・・・グ・・・ヒユウガアアアアアアアアアアア！）

深海棲艦の叫びは水底の水に吸われ、響くこともなく遙か上方へと消え去った。あとに残されたのは、静かで暗く、重たい水だけだった。

自分でも勿体無い事をしたとは思う。仲間を裏切ることになるとはいえ、死なずに済む機会を自ら放棄してしまった。それに、あの深海棲艦は今まで出逢った誰よりも自分を求めてくれていた。差し出された力よりも熱く、彼女の掌は自分を欲していた。あれほどに希求されたことは一度もない。或いは鎮守府以上に、彼女は自分の居場所になってくれたのかも知れない。

——せめて、敵同士で出逢わなければ・・・

それこそ詮無い話だ。自分は艦娘として生き、彼女に出逢った。彼女は深海棲艦として生き、自分に出逢った。ならば戦いは必然で、交わす言葉は砲弾でしかない。ただ——もしも争いのない、平穏な世界で出逢えたのなら、もしかしたら。

——叶うなら・・・いつか、静かな、そんな海で、もう一度出逢おう・・・

未来への夢を抱きながら、そうして彼女は眠りに就いた——



子供の頃の話だ。

姉は、私の手を振りほどくと、さっさと先へ行ってしまった。急いで姉を追いかけた私は、慌てて躓き、転んでしまった。

振り向いた姉は、私にこう言ったのだ。

「遅いよ、日向。置いてくからね！」

あとがき

ウチの日向沈んでねえから！ ちゃんと応急修理要員積んでたから！

あ、ども。サークル『簡易溶接所』代表のハンダゴテです。日向V.S.ル級、長門V.S.タ級がマイジャステイス。好きな艦娘は赤城・加賀・日向・夕立（改二）です。普段は東方の二次創作で活動して、偶に浮気したりしてます。偶にね。

一航戦も好きなんですけど、妄想はどうにも日向の方が膨らみますね。落ち着いた雰囲気と思わせぶりの物言いが好きです。二人姉妹（兄弟）の下の方、という自分とちよつと重なった境遇の所為もあるかと思えます。まーウチはそこまで仲良くはないですけどね。

実は艦これSSは二本目です。以前ブログの方にもチロツと一本公開していて、その時も日向中心の沖ノ鳥海域攻略の話でした（ちなみにゴテはそのSS公開一週間後に沖ノ鳥海域クリアしました）。はい・・・SSと同じく旗艦未撃沈です、ご確認下さい。

艦これの二次創作は間に合せの短編で書くくらいかなー、と思ってます。活動の中心はまだ東方。生活の中心はどっぶり艦これ。これアカン奴や。

で、今回コミケ当日の物理的頒布が間に合わなかったということで、試験的にタブレットPCを活用してみています。PDFファイルを化した原稿を突っ込んでその場では試し読み、後日ファイルをサイトにアップしよう、という形ですね。今後試読にタブレットというブレンナーノリキは役立つのか？ 待て、次号。あるのか、次号。あるさ、次号。

二〇一三年一月二十九日 データならその場でも書けるんですよ的な ハンダゴテ

奥付

艦隊これくしょん fan book

SWS-08.5

底

~bottom~

著者

ハンダゴテ（簡易溶接所）

原作

艦隊これくしょん ～艦これ～
（DMM.com／角川ゲームス）

発行日

2013/12/30

印刷

（本誌は PDF ファイルでのみ頒布しております）

連絡先

Mail → lead_tin_alloy@hotmail.co.jp

HP → 簡易溶接所 <http://swstation.web.fc2.com/>

無断転載・・・瑞雲で吹き飛ばせばいいのか？ ^